

造形教育と感性

－「学習指導要領」の「感性」の捉え方－

内 田 裕 子*

【要 旨】 平成 20 年 3 月 28 日に改訂された小学校「学習指導要領」では、図画工作科の「目標」に「感性を働かせながら」の文言が新たに加えられた。これにより、保育所から中学校に至る造形教育の「目標」全てにおいて「感性」が謳われることとなった。しかしながら、「感性」は、場面や人によって捉え方が様々あり、把握が難しい言葉である。そこで本論では、「学習指導要領」における「感性」の捉え方を分析することにより、「感性」に着目した造形教育の方法を考察する¹⁾。

【キーワード】 感性 遊び 自己目的的 学習指導要領

はじめに

平成 20 年 3 月 28 日に改訂された小学校「学習指導要領」で、図画工作科の「目標」に「感性を働かせながら」の文言が新たに加えられた。これにより、「保育所保育指針」²⁾、「幼稚園教育要領」、小学校及び中学校「学習指導要領」の造形教育に関する全ての「目標」に「感性」の言葉が現れた。小学校の図画工作科の「目標」に、「感性」の言葉が加えられた理由を、平成 20 年 8 月の『小学校学習指導要領解説図画工作編』は、「表現及び鑑賞の活動において、児童の感覚や感じ方などを一層重視することを明確にするため」³⁾としている。

しかしながら、「感性」は、場面や人によって捉え方が様々あり、把握が難しい言葉である。その理由は、「感性」が感覚や感情のみならず、一見、相対するものと考えられる理性や認知まで包括する概念であることにある。自らの感覚によって理解できる範疇から、学術的な概念を理解していなければ分からない範疇まで含む「感性」は、実感できる一方で、未解明のため把握が難しい「感覚」や「感情」、及び、高度な抽象化のため難解な「学術的概念」をも内包し、その結果、人々に「感性は分からない」と言われる状況を生んでいる。

本論では、こうした状況を踏まえ、造形教育における「感性」の意味や機能を理解する手掛かりを得ることを目的に、「幼稚園教育要領」及び「学習指導要領」に現れる「感性」の概念を分析する。更に、分析した「感性」の概念に基づき、「感性」に着目した造形教育の方法を考察する。

平成 21 年 5 月 13 日受理

*うちだ・ゆうこ 大分大学教育福祉科学部

I 一般の「感性」の捉え方

1. 「感性」の言葉のイメージ

「感性」の概念を「学習指導要領」で見る前に、まず、一般の「感性」のイメージを知るため、2008年度及び2009年度の前期の授業「図画工作科指導法(小)」で、大分大学教育福祉科学部の2年生を対象に「感性のイメージ」の調査を行った⁴⁾。対象とした学生は、造形教育に関する教科教育の科目を初めて受講する学生であり且つ造形教育を専門としない学生であるため、結果は「感性」に対する一般のイメージに近いと考えられた。

調査の質問は、『『感性』と聞いて、あなたは何を(どんなことを)イメージしますか。イメージすることを自由に書いて下さい。』とした。表1には2008年度、表2には2009年度の回答の全てを挙げ、要約を<>で示し、回答を分類した。

表1 感性のイメージ(2008年度)

回 答	回 答
<芸術・表現> <ul style="list-style-type: none"> ・色 ・美術館 ・ピアノの演奏 ・自分が感じているありのままを表現すること ・素直に感想を言うこと ・自分が一番表現したいこと ・色の組み合わせやモノの配色が上手できる ・自由に自己を発する ・自分の思うままに制作、活動すること 	<感覚> <ul style="list-style-type: none"> ・何かを感じる(感じる事ができる) ・五感で感じ取ったもの ・理屈とは違った直観的なもの ・自然や物や作品などを見たり聞いたりして何かを感じる ・様々な感じ方ができること、またそれを柔軟に受け入れること ・相手の意図を感じていること、考えていることを感じる ・何も考えないでやること ・首の後ろがジワーっとなる瞬間(センスが発揮された瞬間) ・内に秘めたあったかいもの
<先天> <ul style="list-style-type: none"> ・才能 ・センス ・天才 ・素質 ・繊細 ・子ども ・朝(出たばかりの何もまだ吸収していないような芽) ・生まれもった人間らしいもの ・他の人には伝わりにくい自分だけのもの ・他人からは理解され難く伝わり難いもの(個性) ・その人が持っている可能性や能力 	<発想> <ul style="list-style-type: none"> ・発想 ・想像力 ・創造力 ・アイデア力 ・抽象的、眼には見えない能力 ・意外性 ・一瞬の閃き ・イメージの多さ(イメージ) ・頭の中で想像したこと
<後天> <ul style="list-style-type: none"> ・磨くと豊かになるもの ・インテリ ・常識からの解放 ・自由になれる力 	<知性> <ul style="list-style-type: none"> ・見方 ・感じ方 ・考え方 ・ものの捉え方 ・頭の中でのことがらのつながり ・1つのものを見ても、何通りものものが連想されること ・他のものに置き換えられるイメージ ・物を見るときに色んな考えを持つこと
<個性> <ul style="list-style-type: none"> ・個性 ・その人特有の感受性 ・皆違って皆良い ・自分自身の感覚、視点 ・人と違うものが見える ・人が纏っているオーラが見える ・一般とちょっと違う行動をする人 ・人によって違うもので、自由であってよいもの ・その人その人のものの捉え方 	<価値> <ul style="list-style-type: none"> ・自由なもの ・ピカソ ・感じる領域の広さ
	<感情> <ul style="list-style-type: none"> ・感情が豊か ・感情(喜怒哀楽) ・涙 ・心 ・心の動き ・物を愛でること ・豊かな心を持っている ・その時の自分の感情からイメージされるもの ・触れたり見たりして感動する力 ・素直に感動すること

表2 感性のイメージ (2009年度)

回 答	回 答
<p><芸術・表現></p> <ul style="list-style-type: none"> ・独特な世界、アートな世界、難しい印象。 ・表現力、想像力。美術をする時に必要ではないかと思う。 ・絵画鑑賞、博物館、展覧会、昔の古い建物(寺や神社など)、個性。 ・物事を自分の目や肌、耳などで感じ取る。自分の描きたい、作りたい作品を自分の思うように表現してみる。 ・アイデア、インスピレーション。どれだけ豊かな想像ができるか。また、それを形にできるかどうか。 ・直感、センス、美術的なもの、音楽的なもの、生まれ持ったもの。 	<p><感覚></p> <ul style="list-style-type: none"> ・センス、直感。 ・センス、物事の捉え方。 ・センスのようなもの。良い悪いでその人の見た考え方も決まってしまうような気がする。 ・何かのセンス。直感で物事を行える。ピン!ときた感じ?自分の見たまま、感じた有様。 ・物を見たり、感じた時の感覚、または、第一印象。 ・感覚的なもの。五感を働かせ、感じた心情。良し悪し。 ・人間の五感または六感を全部フル活用して、物事を捉えていくイメージ。 ・五感で何かを感じる。人によってそれぞれ違う。小さなことから大きなことまで沢山ある。その時の気分や体調によっても違ってくる。 ・感受性とほぼイコールだとイメージする。 ・感じ取れる能力。 ・何かを見て、人が感じる。 ・あるものに触れることで、何らかの経験や知識を感じ取るための力。 ・周りの人やもの、事象や環境から様々なものを感じ取る感覚のこと。 ・いろんなものを見て反応する。 ・物事を自分の目や肌、耳などで感じ取る。自分の描きたい、作りたい作品を自分の思うように表現してみる。 ・感受性、個人個人のものの捉え方。何かから発せられるメッセージとかを受け取る能力。
<p><先天></p> <ul style="list-style-type: none"> ・才能、自由。 ・一種の才能的なもの。 ・その人が生まれつき持っているもの。 ・生まれつきのもの。その人にしかないもの。似ている人はいても全く同じ人はいない。 ・生まれ持ったもの。才能。感受性。外からの刺激。 ・生まれ持ったもの。感性が豊かな人は、大多数の人と比べて物を見る視点や物事の考え方が少し違っている。 ・生まれつきのもの。「才能」という言葉とニュアンス的に少し似ている。「感性が鋭い」という言葉。 ・生まれつきもったその人独自のもの。きれいなものをきれい、かわいいものをおかしいと思う心。 ・直感、センス、美術的なもの、音楽的なもの、生まれ持ったもの。 ・天性でもあり、努力でもあると思う。発明に近いもののように感じる。だからか99%の努力と1%の閃きというエジソンを思い出してしまう。 	<p><発想></p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人がもつ考え、アイデア。 ・アイデア、誰もが持っているもの。 ・直感、能力、人よりいろんな感じ方ができる、アイデアが豊富。 ・インスピレーション、思いつき。 ・インスピレーション、想像力、対象物を見て何かを考える力。 ・天性でもあり、努力でもあると思う。発明に近いもののように感じる。だからか99%の努力と1%の閃きというエジソンを思い出してしまう。 ・アイデア、インスピレーション。どれだけ豊かな想像ができるか。また、それを形にできるかどうか。 ・その人が持っている独創的な感じ方。 ・自分が感じる色々な感情や、物事に対する考え方やアイデア。
<p><後天></p> <ul style="list-style-type: none"> ・天性でもあり、努力でもあると思う。発明に近いもののように感じる。だからか99%の努力と1%の閃きというエジソンを思い出してしまう。 	<p><知性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・瞬間的、個人個人が感じるもの、知的。 ・ある事柄について、それをどのように感じ、どのように考えるか。個人の特徴が出るものだと思う。
<p><個性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・人それぞれの感じ方。 ・その人が持っている独特なものの捉え方。 ・人によって異なるもの。瞬間的なもの。 ・物事を見たり聞いたりして、何かを感じ取るかという個性。一人ひとり違う。 ・一人ひとり違うもので、個性や自分らしさ、またその時の自分の気持ちであると思うので、喜怒哀楽など様々な表わし方を持っていると思います。そして、それは、表わすことで他人に伝わるので、表に出さなければ自分にしか分からないのではないかと考えます。また、自分だけでなく、他人やものに対しても抱かれるものです。 ・特徴のようなものをイメージする。感性は一人ひとり異なるものだと思う。感性が豊かだといふけれど、感性は個人によって違うものだから豊かか乏しいかは判断しにくいと思う。 ・その人がすばらしいとか感じる。それは、他人に理解出来ることもあれば、出来ないこともあると思う。 ・その人が持っている独創的な感じ方。 ・自分が思っていること、感じていること。一人ひとり違うもの。 ・瞬間的、個人個人が感じるもの、知的。 ・絵画鑑賞、博物館、展覧会、昔の古い建物(寺や神社など)、個性。 ・自分が感じる色々な感情や、物事に対する考え方やアイデア。 ・ある事柄について、それをどのように感じ、どのように考えるか。個人の特徴が出るものだと思う。 ・感受性、個人個人のものの捉え方。何かから発せられるメッセージとかを受け取る能力。 	<p><価値></p> <ul style="list-style-type: none"> ・美しいものを美しいと思えたり、自分自身、素直にいろんなことを思えたりすること。 ・絵画鑑賞、博物館、展覧会、昔の古い建物(寺や神社など)、個性。
	<p><感情></p> <ul style="list-style-type: none"> ・感情表現。心の豊かさ。 ・自分が思っていること、感じていること。一人ひとり違うもの。 ・生まれつきもったその人独自のもの。きれいなものをきれい、かわいいものをおかしいと思う心。
	<p><なし></p>

※ゴシック文字で示した回答は、複数の分類箇所に入る回答を表わす。

調査では更に、『感性』を養うために必要だと思うことを書いて下さい。」及び『感性』を用いることによって可能になること、あるいは『感性』が豊かであることによる利点があると思いますか。思う人は、あなたが考える可能になることや利点を書いて下さい。」の2つの質問を行った。これらの回答を表3と表4に挙げる。類似する回答を要約し、右欄に記した。

なお、回答は、同じ調査で行った2つの質問（いつまで美術科を学んだか、図画工作科・美術科の授業は好きだったか）の回答に基づき、左端に記す3つに分類して掲載する。

表3 「感性」を養うために必要なこと

<好き：中学校まで>	回 答	要 約
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小さい頃から、色々なものに触れること。美術なら絵!!ではなく、音楽、文学、遊ぶこと、人と沢山関わること、自然と触れ合うこと等も大切だと思う。 ・ 芸術作品でも音楽でも、好きなものだけでなく幅広く色々なものを見聞すること。 ・ 経験（色んな角度から物事を見ていく）。 ・ いろんな経験をする（視点が変わると思う）。 ・ 色々なもの（人や作品など）に触れること。 ・ 様々な種類のもの、ことを見て経験すること。 ・ 様々な体験をして、それを五感で感じ取ること。 ・ あらゆることを経験して、そこから何か自分なりに感じ取ること。 ・ 色々なものを見聞きして、日々感動すること。 ・ 自然を良く観察する。物体を良く観察すること。 ・ 沢山の物を見て、沢山の音を聴いて、沢山の自然と触れ合う。人と触れ合う中でも自分の考えを持つこと。 ・ 絵を見た感想を書く時のように、ものに触れて何を得られたかを理解・表現すること。いろんなものをじっくり聞いて、そのことに対して独自の視点や考えを持つことが必要だと思う。 ・ 様々な体験をする。自分や人の考えを否定しない。 ・ 色々な体験、経験を得てみる。例えば、色々な場所に行き、自分が見たことのない風景等を見る。また、それを何らかの形として残してみる。 ・ 愛でる。興味を持つ（惹く）。経験。 ・ 色々な作品を見たり触れたりして、経験を増す。そして自分でも新たなことに挑戦する。 ・ 様々なモノや環境に積極的に触れ合ったり関わっていったりする。 ・ 感性の鋭い人から学んだり、学びとったりすることが必要だと思います。 ・ 自分自身を持つ。他人の意見等も吸収しつつ、大きくしていく。 ・ 相手を見る（と話す）。客観的に見る。試行錯誤。 ・ 博物館等の、普段見たり、経験したりすることができない所へ行くことによって養われると思う。 ・ 芸術や芸能などに長く接すること。 ・ 有名な画家の絵を沢山観る。美術的な活動を幼少期から行う。 ・ 多くの芸術を見て、それについて話すこと。家族で博物館や美術館へ行って、話したりすることがとても良かったと思う。 ・ 何枚かの絵や作品を準備して、その中の一つについて、何かストーリーを考えさせたり、自分の思ったままに何かを描かせたりすることだと思います。 ・ 日常生活の中で自然に感じたこと等を、言葉や絵などで表現していく。 	<p><経験></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼少期からの多様な経験（遊ぶ、人と関わる、自然と触れ合う） ・ 多様な経験（見る、触れる、感じる、感動する、観察する） ・ 多様な経験に基づき「独自の視点を持つ、視点を広げる、視点を増やす、理解する、表現する、自他の考えを否定しない」こと。 ・ 見たものを形に残す <p><興味・関心></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 愛でる ・ 興味を持つ ・ 新たなことへの挑戦 ・ 積極的な周囲への関わり <p><学習></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 鋭い感性を持つ人から学ぶ ・ 自分自身を持つ ・ 客観視 ・ 試行錯誤 ・ ハレの場での経験 <p><芸術></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 長く芸術や芸能に接する ・ 美術的な活動 ・ 鑑賞（作品を見て語る、作品に基づく創作表現（物語、描画、文章））
<好き：高校まで>	回 答	要 約
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 色々なものに触れたり、体験したりする。 ・ 沢山のものや、経験を積むこと。「感性」を養うと意識するのではなく、自然と身について来ると思う。 ・ 自然と触れ合う、友人や多くの人と関わる。本を読む、絵を描く、自分を表現する。 ・ たくさんのものに触れる。美術であれば、いろんな作品に触れ、そして仲間と意見交換することで、互いの違いなどが分かって、そこから感性が養われる。 ・ 観察力を付ける（目頃から色々なものを見る）。想像力をフル活用する。 ・ できるだけ多くの考えやアイデアを吸収する。 ・ 幼い頃から絵や音楽などの芸術に触れること。 ・ 何事にも興味を持つ。 ・ 人とのつながりを沢山持つ。 ・ 私は感性は特徴のようなものだと考えているので、自分の持つ特徴を他人に認めて貰うことで、より意識し、養うことができると思う。 	<p><経験></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 多様な経験（感性を意識しない経験の積み重ね、自然や人との触れ合い、観察力を付ける、想像力を働かせる） ・ 自己表現（描画、意見交換） <p><学習></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他者の考えやアイデアの吸収（読書） ・ 幼児期からの芸術経験 ・ 好奇心を持つ ・ 沢山の人のつながり ・ 他者に認められる経験
<嫌い>	回 答	要 約
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 色々なことを体験する（見たり、聞いたり）。 ・ 偏った体験をするのではなく、様々な体験をすること。 ・ 色々なことを経験すること。色々な人と会話をする。 ・ 色々なことを経験する。学校の授業だけではなく、外に出て身近なことの変化に気付く。（例えば、この間まで蕾だった花が今日は咲いていた等） ・ 読書をしたり、今まで行ってみたいことのない所や関わったことのない人と話してみたりと、活動の場所を広げていくこと。 ・ 様々なジャンルのもの（教科や方法に囚われない）に触れる。例：音楽や美術作品、文学作品など。 ・ 習慣。 ・ 目頃から色々なことに興味・関心を持ち、その都度、考えるようにすること。 ・ 日常生活を有意義に過ごすようにする。そのためには、様々な活動を体験したり幅広い分野に積極的に関わったりすることが大切だと思う。 ・ 幼い頃から色々な物を見せる。 ・ 小さい頃から積極的に絵を描いたり何かを作ったり音楽をしたりすることの楽しさを教えること。 ・ 感覚に様々な刺激を与えるために、様々な物を見たり触れたり感じたりすること。多くの経験。 ・ 人の見方を知ること。色々な物を見て感じる。 	<p><経験></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 感覚へ多様な刺激を与える ・ 他者の見方を知る ・ 未知との邂逅（人・物・事・場・本・芸術） <p><習慣></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 興味関心を持って考える ・ 有意義な日常生活を送る ・ 多様な経験 ・ 積極的な関わり ・ 幼児期から多様なものを見る ・ 幼児期に芸術活動の楽しさを学ぶ

表4 「感性」が可能にすること

＜好き：中学校まで＞	回 答	要 約
	<p>・他人が感じるより、更に深く感じ、考えることが出来る。</p> <p>・人生が大きく豊かなものになると思う。些細なことにも情緒を感じ取ったり出来るから。</p> <p>・色んなことを純粋に受け入れることが出来る。人の考えを大切にしつつ、自分の考えも大切に出来る。</p> <p>・物事をより柔軟に受け止められる。1つのことから沢山のことを感じられる。それだけで人生、日々の生活はより豊かで楽しいものになると思う。</p> <p>・1つのお題からより多くの選択肢を見出すことが出来る。</p> <p>・自由な発想がすぐに浮かんでくるようになると思う。その結果、色々な活動を進んで楽しむことが出来るようになると思う。</p> <p>・仕事とかで新たな発想力が生まれる。感性が豊かな人の方が、物事の捉え方や、視野が広くなると思う。</p> <p>・様々な視点から見ることが出来たり考えたりすることが出来るという点。</p> <p>・例えば、絵を描いたりする時は、色々な視点から「物」を見えたりしちゃうから。</p> <p>・物事をあらゆる視点から捉えることが可能。</p> <p>・今までにない視点を持った意見が言える。新たな発見（発想）が生まれる。</p> <p>・創造性が育まれ、自由な発想の幅が広くなり、場面によって柔軟な対応が出来る。</p> <p>・沢山アイデアが生まれ、それがまた他人への良い刺激となって感性を養うことが出来る。</p> <p>・自分の感動を人に伝えられるようになる。色んな人の考えやあり方を否定しなくても理解出来る。</p> <p>・自分や他人に対して思い遣ることが出来る。また自分や他人を理解するためにも必要。</p> <p>・その人の個性を表すことが出来る。また、良く思われたり、自分の良いところを主張している。</p> <p>・人生の幅が広がる。例えば、物事に対する考え方が柔軟になったり、人間関係でも他人への思い遣りの気持ち深まり、より良い人間関係が築ける等。</p> <p>・人生楽しく、豊かになると思う。</p> <p>・心が豊かになり、細やかな幸せを沢山見出せるようになる。</p> <p>・何事もプラスに考えられる。</p> <p>・問題をポジティブに解決できる。豊かな心を持つ。ものを見る目を養える。追究心がつく。</p> <p>・1つの表現に囚われず、別の表現方法を用いて、新たな作品を生み出すことが出来る。</p> <p>・表現する方法が豊かになる。</p> <p>・感性を用いて自分の中の思いを表出することによって、表現力豊かな人間になれる。</p> <p>・表現力が豊かになるのではないと思う。</p> <p>・「感性」が豊かな人が独特な絵を描いているのを見た時、凄く魅力を感じ、凄いなと思った。</p> <p>・より良い作品を作ることが出来る。例えば、物体を見て描くのであれば、より本物に近い作品が出来る。</p> <p>・様々なことに関して、関心を持つことが出来ると思う。作品を作ったりする時でも、みんなが当たり前に行っているところで留まるのではなく、その一歩上を目指せる気がする。</p> <p>・なし</p>	<p>＜敏感な感覚＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・深く感じる、きめ細かな関心 ・些細なことに情緒を感じ取る ・純粋、柔軟な受容 <p>＜柔軟性ある思考力＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由な発想 ・考える（柔軟性） ・多様な視点を持つ ・創造性 ・アイデア（他者への刺激） <p>＜価値理解＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己理解、他者理解 ・他者の存在を認める ・思い遣り（より良い人間関係） <p>＜豊かな人生＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人生の幅が広がる ・楽しい人生、豊かな生活 ・幸せの発見 <p>＜積極性＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プラスの志向性 ・積極的な問題解決 ・個性（良さの主張） <p>＜豊かな表現力＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な表現方法 ・当たり前の一歩上を目指す ・豊かな表現力 <p>＜利点はない＞</p>
＜好き：高校まで＞	回 答	要 約
	<p>・物事を色んな角度から見たりすることが出来ると思う。他人が表現したい、伝えようとしたことをこちら側から感じる事が出来る。</p> <p>・色んなものの考え方が出来、一つのを違った視点から見るとも可能になり、自己表現能力も上がる。</p> <p>・色々なことを体験出来て挑戦出来る。仕事の出来る人になれるかも？</p> <p>・どんなことでも（それがたとえ小さなことでも）、創造の限界を広げることが出来る。あるいはものの見方を広げることが出来（日常生活でも）、「物事に取り組むこと」が楽しくなる。</p> <p>・自分しかならない考えや世界を表現することが出来る。自分の考えや想像をより一層、それに近いもので表現することが出来る。</p> <p>・本人の考えを作品に表現が出来る。他人には考え付かなかったような視点を感じられる。</p> <p>・利点や出来ることと言うより、「感性」があれば自分を表現しやすくなると思う。</p> <p>・新しい音楽や絵などを生み出せる。心が豊かになる。</p> <p>・毎日が素晴らしくなると思う。多分、色々なものを見て、思いを巡らせて楽しめると思う。</p>	<p>＜多様性＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な見方、感じ方、考え方 ・多様な体験、挑戦 <p>＜飛躍＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・創造の限界を広げる <p>＜表現力＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独自の世界を表現する ・考えを表現する <p>＜豊かな人間・人生＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな心 ・素晴らしい毎日
＜嫌い＞	回 答	要 約
	<p>・色んな想像力が膨らむと思う。</p> <p>・他の人と同じ体験をした時に、他の人よりも多くのことを感じたり理解したりすることができると思う。</p> <p>・日常の生活の中での何気ないことについて考えることができる。</p> <p>・ものを他者と違う捉え方をし、奇抜な発想で他者を驚かすことが出来る点。</p> <p>・色々なことにおいても役に立つと思うし、得をすると思う。人間関係もうまくいくだろうし、人生が楽しいと思う。</p> <p>・色々な創作活動に積極的に取り組めたり、仕事の間でもアイデアが生まれると思う。</p> <p>・視野が広がる。</p> <p>・自分の気持ちを伝えることができる。世界が広がる。</p> <p>・色んな考え方が出来、人生を楽しく送れると思う。</p> <p>・私はジャズドラムをしているのですが、ジャズはソロが自由なので感性が豊かであるとソロもとても豊かになると思います。</p> <p>・より良い、より心の籠った作品を作ることが出来る。また、人に優しく接することが出来たり、人生を有意義なものに出来る。</p> <p>・人に話したり、文章にしたり、描いたり、作ったりするなど、何かを表現する時に、豊かな表現をすることが可能になる。また、色々なことに気付いて、自分なりに考えることが出来る。</p> <p>・様々なものによる刺激を沢山受けて来たことなので、表現力が付くと思います。そのことによって造形などで役に立つと思います。</p>	<p>＜敏感な感覚＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・想像力 ・何気ないことを考えられる ・理解する ・他者を驚かす <p>＜多様性＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な考え方 ・楽しい人生 ・広い視野、広い世界 <p>＜表現力＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな表現 ・心の籠った作品 ・自律した考え方 ・気持ちの伝達

表1及び表2を見ると、2009年の受講生で〈好き：中学校まで〉に分類される学生1名が「イメージがない」と回答した⁵⁾以外は、全て「感性」に対して何らかのイメージを持ち且つ必要なものと捉えていることが分かる。また、そのイメージは、図画工作科・美術科の好き嫌い及びいつまで美術教育を受けたかには関係がないことも理解できる。更に、表2のゴシック体で表わす回答からは、「感性」の言葉に対するイメージが多岐に亘り、「感性」が多様な意味を内包している言葉と捉えられていることが認められる。但し、両表が同じ要約の言葉で分類できることから、感性のイメージには、傾向があることも読み取れる。

表3からは、経験、興味・関心、学習、芸術、習慣が、感性を養うために必要であると考えられていることが分かる。更に、表4の『『感性』が可能にすること』には、〈好き：中学校まで〉の2名が「ない」と答えているが⁶⁾、他は全員「ある」と答え、その回答の要約を集約すると、「優れた感性を持つことによって、感覚、思考力、理解力、行動力、意識、表現力等が多様で優れ、その結果、自律した人間となって豊かな行動ができるようになり、延いては、豊かな人生(生活)を送ることができる」となる。即ち、学生は「優れた感性を身に付けた結果、人は外界を受容する力と外界へ表出する優れた力を持ち、その力によって自ら考え行動し、人生を楽しく豊かにすることができる」と考えていることになる。

以上の結果から、「感性」の言葉は、一般に、多様なイメージを彷彿させるものの、そのイメージには傾向があると捉えられていることが分かる。

2. 一般の「感性」の概念

上記の結果を受け、「感性」のイメージを尋ねた同じ学生たちに、今度はグループで「感性」の定義を考えて貰った⁷⁾。1グループの構成は、原則として、学科が異なる面識の無い学生3人、方法は、グループでの討議により、グループで1つの『『感性』の定義』を導くこととした。次に挙げる表5の「グループの回答」欄には、各グループが導いた『『感性』の定義』を記し、右欄には、その要約を挙げる。

表5 「感性」の定義

	グループの回答	要約
定義	<ul style="list-style-type: none"> • ものを感じ取る力。 • 全ての人が持っているものの見方や感じ方、センス、直観のこと。 • 生まれつき持ったもの。センス。ものの見方、捉え方。 • 誰もが持っている人それぞれ異なるものごとの考え方、捉え方。 • 人や物に対して直感的に自由に感じるもの。一人ひとり違って良い悪いはない。 • ある事柄を瞬間的に感じる。また、感じ取り方は、人それぞれ異なる。 • 一人ひとりが持っている捉え方や感じ方。人それぞれに異なるもの。 • 一人ひとりが持つ物の考え方や感じ方。 • 一人ひとり違うもので自由である。また、色々な経験を積むことで養っていけると思う。 • 生まれてから周りの環境に左右され築き上げられていくもので、ほぼ感受性と同義である。 • 外からの刺激に対して人が考えたり、感じたりすることで、個々によって異なるものである。また、元々個人が持っているものでもあり、生きていく環境や生活の中で養われていくものである。 • 物事を自分の目や肌、耳などで感じ取る能力。これはその人が持っている独自の感じ方で、何らかの形で表出することで他人に伝わる。あらゆる人が生まれつき持っているもので、感性の豊かさは天性のものであり、努力でもある。 • 自分自身の持っている感受性。生まれつき持っているもの。外からの刺激とか年齢が上がるにつれて変化する。経験、知識により変化する。 • 一種の才能のようなものかもしれないが、決して生まれつきだけではなく、成長し、いろいろなものに触れ感じることで養えるもの。 • 元々持っている部分もあるが、それまで成長してきた過程や環境からも影響を受けて育つ。 • 人が生まれつき持っている一種の才能のようなもの。全く同じという人はこの世にいない。自分の周囲の刺激物から力を受け、目、肌、耳など五感で感じ取るもの。 • 個々の持つ感受性。想像を形にする表現力。 • 自ら感じた事を直感的に表現する力。 • 物事を見たり聞いたりして、どのように感じまたどのように表現するかという個性。 • その人が生まれつき持って、でも育むこともでき、心の豊かさに繋がるもの。 • 一人ひとり違うもの。自分らしさを表すもの。その人の心の豊かさ。 	<p>感じ方+普遍的</p> <p>先天的 個人的</p> <p>考え方 後天的 先天的+後天的</p> <p>表現</p> <p>豊かな心</p>

グループ活動の際には「形成的評価表」⁸⁾を実施した。これにより、学生個人の「感性」の考え方(表1~4)が、他者の考え方と齟齬を来すものではないことが分かる。そのことは、表5に挙げた「感性」が先天的且つ後天的なものとする定義に表れている。即ち、個人では、「感性」が先天的か後天的かは二者択一の回答であり、その両方を共に「感性」のイメージと捉えている学生は少なかったが、グループでの討議では、多くが両方を含むものとなっており、異なる他者の意見を受け入れたことが分かる。その際、学生が「形成的評価表」の自由記述欄に「自分では思わなかった他者の意見を聞くことが出来て良かった」と述べていることから、「感性」に関しては、他者の考え方と齟齬を来さないという結論を導いた。

表5の要約を見ると、「感性」が、感じ方や感受性といった「受容的」なもの、考え方や表現等の「表出的」なもの、また、才能か経験かといった「先天的」なもの、「後天的」なもの、更に、「万人が持つ(普遍的)」ものと「個人が持つ(個人的)」ものという、3つの軸によって構成されると考えられることが分かる⁹⁾。図1は、これら3つの軸に基づき、「感性」の概念を図式化したものである。但し、アンケート結果により近付けるため、3つの軸は各々、受容的-表出的→impression-expression, 先天的-後天的→a priori-a posteriori, 普遍的-個人的→universal-individualに変更した。また図2は、図1の各象限の概念の解説図である。以下の2つの図が、本章で導いた一般の「感性」の捉え方とする。

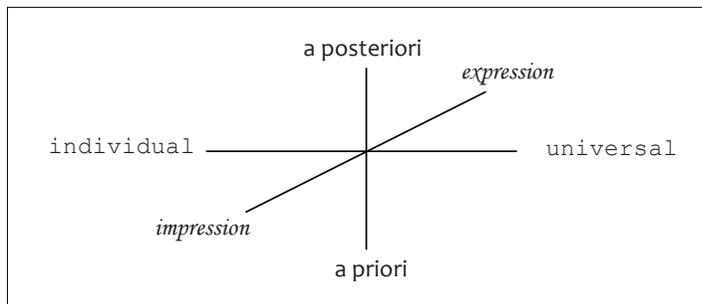


図1 「感性」概念図

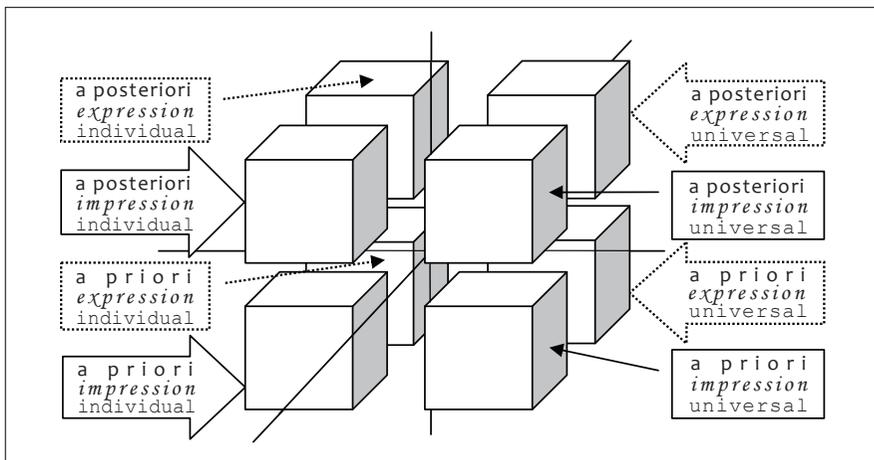


図2 「感性」概念図象限解説図

Ⅱ 「学習指導要領」における「感性」の概念

1. 「感性」の登場

本章では、Ⅰ章で明らかにした一般の「感性」の捉え方を踏まえた上で、「学習指導要領」における「感性」の概念を分析する。

「感性」の言葉が、図画工作科・美術科の「学習指導要領」に初めて登場したのは平成元年である。当時は小学校の図画工作科の第5学年と第6学年の「目標」に記されていた。それから20年を経て初めて、「感性」の言葉は図画工作科の「目標」に登場したが、中学校美術科では、平成10年の「学習指導要領」に初めてその言葉が登場して以来、終始「感性」は教科の「目標」に位置付けられて来た。なお、今回の改訂により、小学校も中学校も、各学年の「目標」として「感性」の記述は無くなり、これにより、幼稚園、小学校、中学校のいずれの教育機関においても、「感性」は造形教育の目標としてのみ位置付けられることになった(表6～8)。

表6 「幼稚園教育要領」に見られる「感性」

平成元年	平成10年	平成20年
<p>〔総則 2 幼稚園教育の目標(5)〕 多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにすること。</p> <p>〔ねらい及び内容〕 幼児の発達の側面から(中略)感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ…</p> <p>〔表現〕 この領域は、豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示したものである。</p> <p>〔1ねらい(1)〕 いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。</p> <p>〔3留意事項(1)〕 豊かな感性は、日常生活の中で美しいもの、優れたもの、心に残るような出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し様々に表現することなどを通して養われるようにすること。</p>	<p>〔総則 2 幼稚園教育の目標(5)〕 多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにすること。</p> <p>〔ねらい及び内容〕 幼児の発達の側面から、(中略)感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ…</p> <p>〔表現〕 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</p> <p>〔1ねらい(1)〕 いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。</p> <p>〔3内容の取扱い(1)〕 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。</p>	<p>〔ねらい及び内容〕 幼児の発達の側面から(中略)感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ…</p> <p>〔表現〕 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</p> <p>〔1ねらい(1)〕 いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。</p> <p>〔3内容の取扱い(1)〕 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。</p>

表7 小学校「学習指導要領・図画工作編」に見られる「感性」

平成元年	平成10年	平成20年
<p>〔第5学年及び第6学年〕1目標 (3) 造形作品などを進んで鑑賞し、そのよさや美しさを感じ取り感性を高めるとともに、それらを大切にすることができるようにする。</p>	<p>〔第5学年及び第6学年〕1目標 (3) 造形作品などを進んで鑑賞し、そのよさや美しさを感じ取り感性を高めるとともに、それらを大切にすることができるようにする。</p>	<p>目標 表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。</p>

表8 中学校「学習指導要領・美術編」に見られる「感性」

平成10年	平成20年
<p>目標 表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。</p> <p>〔第1学年〕1目標 (2) 対象を深く観察する力、感性や想像力を高め、豊かに発想し構想する能力や基礎的な技能を身に付け、多様な表現方法や造形要素に関心をもち、創意工夫し美しく表現する能力を育てる。</p> <p>〔第2学年及び第3学年〕1目標 (2) 対象を深く見つめる力、感性や想像力を一層高め、独創的・総合的な見方や考え方を培い、豊かに発想し構想する能力や自分の表現方法を創意工夫し創造的に表現する能力を伸ばす。</p>	<p>目標 表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。</p>

2. 美術科での「感性」の捉え方

今回の改訂で、「学習指導要領」に、「感性」の言葉が「目標」として定着した経緯を見るため、平成10年に初めて「感性」の言葉が美術科の「目標」として導入された際の「感性」の捉え方を調べた。『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—美術編—』（平成11年9月）では、資料1のように説明する¹⁰⁾。

資料1 「感性」を美術科の目標に位置づけた理由

美術は目に見えるものや、目に見えない想像や心、精神、感情、イメージといったものを可視的・可触的なものに表現し実体化できる唯一の教科であるといつてよい。この特質は、今回の教育課程の基準の改善にあげられた「美しいものや自然に感動する心」の育成に強くかかわることから、心の働きである感性の育成は一層重視する必要がある。

感性とは、「様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力」であり、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなす重要な資質である。美術は特に、対象のもつ美しさや生命感、心情、精神的・創造的価値といったものについての感性を中核としている。現代の生活においては、柔軟に心豊かにたくましく生きていく視点からも感性の育成の重要性が指摘されており、美術において感性を育てることは極めて大きな意味をもっている。したがって、表現や鑑賞の活動を通して、視覚、触覚などを働かせて心で観ることの体験を積み重ねることが感性を豊かにする上で大切になる。

資料1には、①造形教育の特質として感性を捉える理由、②感性の定義、③感性を育成する目的・方法について述べられている。これを解釈すると次のようになる。

- ①造形教育の特質は、眼に見える・見えないに拘らず、見たり触れたりできる実体にするところであるが、これは（平成10年の「学習指導要領」の改訂の際、教育課程の改善の基準とされた）「美しいものや自然に感動する『心』の育成」に強く関わることであり、この「心」の働きは即「感性」のことであるため、その育成を一層重視する必要がある。
 - ②「感性」は、「様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力」であり、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなす重要な資質である。美術では、対象のもつ美しさや生命感、心情、精神的・創造的価値についての「感性」を中核とする。
 - ③「感性」の育成には、「心で観ることの体験を積み重ねること」が大切である。現代社会で柔軟に心豊かにたくましく生きていくために「感性」は重要である。
- 以上が、美術科の「目標」に「感性」の言葉が位置づけられた理由と言える。

3. 図画工作科での「感性」の捉え方

表7に示したように、今回の「学習指導要領」の改訂により、小学校の図画工作科の「目標」に「感性」の言葉が位置付けられた一方で、これまで「第5学年及び第6学年」の鑑賞の「目標」の箇所で挙げられていた「感性」の言葉が削除された。このことは、「感性」を、鑑賞のみならず表現においても育成し、また学年を限定せず育成するよう意図したことを示す。

このように、図画工作科の「目標」に「感性」の言葉を新たに位置付け、小学校及び中学校の造形教育の「目標」に、共に「感性」の言葉を位置付けた意図については、次の資料2に挙げた中央教育審議会（以下、中教審という）の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」¹¹⁾から読み取ることができる。

資料2 中教審答申

小学校の図画工作科、中学校の美術科、高等学校の芸術科（美術、工芸）は、表現及び鑑賞にかかわる幅広い活動を通して、美術を愛好する心情と美に対する感性を育て、造形的な創造活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養うことをねらいとしている。

上記のねらいを達成するため、答申では課題として、感性を働かせて思考・判断し、創意工夫をしながら表現したり作品を鑑賞したりするという一連のプロセスを働かせる力を育成することを掲げる。更に、小学校でこの課題を解決する方法としては、①育成する資質や能力を整理する、②表現や鑑賞の過程で働く力を明確にする、③上記の力が関連して働くようにする、④児童が自らの行為や感覚をもとに形や色、イメージ等を活用して活動することができるように、領域や項目などを通して共通に働く資質や能力を〔共通事項〕として示す、を挙げる。

以上のことから、「学習指導要領」の改訂で、「感性」が、小学校でも中学校でも、表現と鑑賞の両方を通して、学年に関係無く育成するものとなったことが分かるが、更に注意深く「学習指導要領」の文章を読むと、「学習指導要領」では、小学校と中学校の「感性」の取扱いに違いがあることに気付く。次に、その点を見る。

4. 小学校と中学校での「感性」の捉え方の違い

小学校の図画工作科の「目標」は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」、中学校の美術科の「目標」は、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」であるが、両者の最大の違いは、小学校では「感性を働かせながら」となっているのに対し、中学校は「感性を豊かにし」となっている点である。

これは、先に見た中教審答申を反映させたものと考えられるが、「目標」への2つの異なる「感性」の掲げ方に留意して改めて答申を読み解くと、次のような解釈ができる。即ち、中教審は、図画工作科・美術科を「美術を愛好する心情と美に対する『感性を育て』、造形的な創造活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養うことをねらい」とする教科と捉え、このねらいを達成するためには、「『感性を働かせ』て思考・判断し、創意工夫をしながら表現したり作品を鑑賞したりするという一連のプロセスを働かせる力を育成すること」が課題であるとする。つまり、「感性を育て」ことは造形教育の目標であり、且つ、「感性を働かせ」ことはその目標を達成する手段となると中教審が捉えていることになる。これは、手段と目的が一致することを意味するものであり、造形教育における「感性」が、自己目的的なものであるとの解釈を成り立たせる。

一見、不合理にも見える解釈であるが、実は、表1～表5の一般の「感性」の捉え方にもこの解釈は現われていた。それは、代表的な次の事項、即ち、表3『『感性』を養うために必要なこと』の「色んな角度から物事を見ていく」が、表4『『感性』が可能にすること』の「物事を色んな角度から見たりすることが出来る」に対応することに見て取れる。本人はその関係に気付いていなくても、各々個別に「感性」の働きとして把握していることがここから分かる。

なお、芸術における自己目的的な考え方には、「芸術のための芸術 (l'art pour l'art)」がある¹²⁾。この考え方で「感性のための感性」を捉えてみると、「感性」は「それ自身のために存在し、他の何ものにも制約されない」となり、また「目的論 (teleology)」を適用した場合は、「感性」は「自己自身のうちに自己自身の在り方を規定する原理 (力) を持っている」と捉えることができる。

Ⅲ 自己目的的な感性

1. 自己目的的な遊び

自己目的的とは、他に目的を取らないことであるが、その顕著な例に「遊び」がある。「感性」と同様に、「遊び」にも多様な捉え方があるが、その中に「楽しいから遊び」というものがある。これは、余剰エネルギー説や生活準備説のように、何らかの目的を達する手段として「遊び」の存在を捉えるのではなく、自然発生的に行われた或る行為が、楽しくなるとそれが「遊びになる」という考え方である。その機能とは、「一義性を曖昧にして多義性（多種多様な意味＝イメージ）を開示する」¹³⁾とされる。これは一般に「見立て」と言われ、例えば「縄の電車」や「コップを型にして作る土だんご」¹⁴⁾のように、本来の意味以外の新たな意味を付与する機能を指す。この、物事の意味を「横滑り」させ曖昧にする遊びの機能は、物事の硬直化を防ぎ、バランス感覚を養うことにも寄与すると言われ、そのため表現の画一化を排して個性的表現に至る多様な見方（多様なイメージを形成すること・構想力）を促し、個性の育成に寄与すると言われる。

こうした「見立て」は、造形活動においてしばしば起こる行為であり、特に、造形を遊びとして行っている際に現われ易い。ここから、「遊び」の機能（見立て）を多く持つ「造形遊び」に教育的有効性が見出され、昭和 52（1977）年、「造形による意味生成の創造的な能力」を目指す「造形遊び」¹⁵⁾が誕生することとなる¹⁶⁾。

2. 「感性」における「自己目的的」機能

ここでは、「感性」が自己目的的なものとして成立するために必要な機能を、「遊び」の機能の考え方を手掛かりに考察する。そのためにまず、「学習指導要領」から、「感性」及び「感性」の記述が現れる前の「感性」に関連する記述を抽出した。

資料 3 中学校美術で育てる表現の基礎的能力：感性

- | |
|--|
| <p>①ものの見方・感じ方を深めること（観る力、感じ取る感性）</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ものを良く見取る力、気付き発見する力、よさや美しさ、情感、雰囲気などを感じ取る感性 ▪ 形・色、量感などの特徴をとらえる力 |
|--|

資料 3 は、平成 10 年改訂の「学習指導要領」で示された「中学校美術で育てる表現の基礎的能力」8つの筆頭に挙げられた「感性」に関する条である¹⁷⁾。ここでは、感じ方を深める手段として、感じ取る「感性」を育成することを重視しているが、その「感じる対象」には、よさ、美しさ、情感、雰囲気を挙げている。同様に、先の答申の改善の基本方針にも、「美に対する感性を育てる」が挙げられていたが、これらに共通するのは「美」に対する感性である。これに関連する記述を、「感性」の言葉が用いられる以前の過去の「学習指導要領」に求めると、小学校では、最初の「学習指導要領」である昭和 22（1947）年版から昭和 43（1968）年版まで¹⁸⁾、「美的情操」の言葉を見出すことができる。

小学校の「学習指導要領」では、昭和 52（1977）年に「豊かな情操」に変わるまで 30 年間、「美的情操」の言葉が用いられた。「美的情操」の解説は、昭和 33 年の小学校・図画工作科の『指導書』に、教科の「目標」である「造形的な表現や鑑賞を通して、美的情操を養う。」に関する記述として見付けることができる（資料 4）¹⁹⁾。

資料4 美的情操

この目標は、人間形成において価値としての**美的情操**を豊かにすることをねらいとするものである。情緒も**情操**もともに感情の状態をさす語であるが、情緒は本能や欲求に直接的な関係をもつのに対し、**情操**は真偽・善悪・美醜などのような価値観の基礎となり、人格や品性を形成する重要な因子となるものである。図画工作科の教育活動は、単に絵をかいたり、ものを作る活動それ自体、あるいはかかる活動に必要な理解とか技術といったものを体得することに終わるというのでは決してなく、表現とか鑑賞という活動を通して、さらに人間形成にとってたいせつな**美的情操**を豊かにしなければならないということを忘れてはならないのである。

更に、昭和52(1977)年、小学校の図画工作科の「目標」が「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な創造活動の基礎を培うとともに、表現の喜びを味わわせ、豊かな情操を養う。」となり、「美的情操」から「豊かな情操」に変わった際は、「豊かな情操」を次のように説明した²⁰⁾。

資料5 豊かな情操

芸術は人間の感情表現と言われ、芸術に関する教科は**情操**の教育をその中心に置いている。感情はあらゆる心理活動に伴って起こる心の様相であって思考作用が個人的な主観を離れ、できるだけ客観的なものを目指そうとするのに対し、感情は自分自身の心の状態であるから、最も主観的、かつ主体性をもったものであり、いろいろな行動を起こすきっかけとなる。芸術的な創造活動はその母体ともなるものである。感情には他の動物とも共通する本能的、自己本位の情動的なものから、人間だけに備わっている**高度の情操**までいろいろの段階がある。児童にはまだ情動的なものが多く残されているが、年齢とともに情緒が安定するようになり、種々の人間文化に触れることにより**情操**が高まっていく。図画工作科においては、美しいものに感ずる**美的な情操**を養うことはもちろんであるが、造形活動の中では、科学的、道徳的なものから、時には宗教的なものまでが関連してくる。すなわち造形活動を通して**豊かな情操**を養うというのは、他から切り離された感情だけの教育をいうものでなく、知、情、意一体の調和のとれた人間の教育を目指すものである。情意の正常な発達を図ることは、学校教育全体の問題ではあるが、造形活動を通して**豊かな情操**を養おうとする図画工作科にとっては、特に重要な目標となる。

昭和52年の「学習指導要領」は、かつての「教育内容の充実」を目指した教育が「ゆとりのある教育」に変わり、図画工作科・美術科においても、作ることを中心とした「造形主義」から表現の喜びを重視した「感性主義」と呼ばれるものになった転換点に当たる。「美的情操」が「豊かな情操」になったのも、資料5の「図画工作科においては、美しいものに感ずる美的な情操を養うことはもちろん[中略]他から切り離された感情だけの教育をいうものでなく、知、情、意一体の調和のとれた人間の教育を目指すものである」という文章が示すように、広く人間形成を行おうとする、時代の趣旨に沿ったものと理解できる。

平成元年の「学習指導要領」では、「情操」に加え「感性」の言葉も小学校「学習指導要領」で使用されるようになるが、この時期は、1986年の「いじめ」の社会的問題化、1978年登場のインベーダーゲームに始まるゲームのブーム化、コンピュータの学校教育への導入等、急速な社会の進歩に応じ生活に変容が起こった時代である。殺伐とした社会の様相が現前し、「豊かな心をもつ一方で、たくましく生きる人間の育成を図る」必要性が出て来たことを受け、「学習指導要領」では、「心豊かな人間の育成」、社会の変化に対応できる「自己教育力の育成」を基本方針に挙げた。そこでは特に、「真理を求める心や自然を愛し美しいものや崇高なものに感動する心を育てること」、「生命を尊重する心や他人を思いやる心を育てること」等が配慮された。

平成元年は、「幼稚園教育要領」においても「感性」が幼稚園教育の「目標」の1つに取り上げられたが、ここでは「感性」の取扱い方を、前掲の表6のように述べる。即ち、「豊かな感性」は、①「身近な環境と十分に関わる」、②「美しいもの・優れたもの・心を動かす出来事に会って感動を得る」、③「感動を他者と共有する」、④「様々に表現する」という一連の働きに基

づいて養われ、「感性」の育成のためには、環境との関わり、感動体験、他者とのコミュニケーション、表現活動が必要条件であるとした。つまり、環境との関わり、感動体験、他者とのコミュニケーション、表現活動のいずれが欠けても「感性」の育成は不可能とした。

3. 「感性」を育成する「美的」なもの

「学習指導要領」で、「感性」とそれに関連する言葉である「美的情操」及び「豊かな情操」の意味内容を見たところ、いずれの言葉の解説にも挙がっていたのが「美」という概念であった。即ち、情操においても感性においても、そこには「美的」なものが介在しており、そのことが図画工作科・美術科の特性であり、教科が成り立つための必要条件と捉えられていた。

これを手掛かりに「感性」を考えると、「感性が感性になる」即ち、『感性』を働かせることによって『感性』を育成する『感性』の機能とは、「遊び」が「多義性の開示」の機能によって「遊びになる」ように、「感性」が対象に「美」という価値を開示する機能によって「感性になる」ことから、「美的価値の開示」と考えられる。このことは、バウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 独, 1714-1762) が、感性的認識についての理論である「感性論」を「美学 (Aesthetica)」として体系付けたことも彷彿させる²¹⁾。但し、美学の定義が「自然・芸術における美の本質や構造を解明する学問。美的現象一般を対象として、その内的・外的条件と基礎を解明規定する。」とされることから分かるように、美学における「感性」は、造形教育で言う「感性」の一側面しか捉えていないことに気が付く。それは、バウムガルテンの「感性」が、「美的な、審美的な」の意を持つ「aesthetic」の語源「aisthētikos」(五感によって物事を知覚する→美に敏感な)とされていたことから明らかである。それに対し、一般に「感性」は「sensitivity」と訳され、芸術・倫理などに対する識別能力の意味を持つ言葉として捉えられる。但し、冒頭述べたように、「感性」の捉え方は複数あり、国語辞典の『広辞苑』にあるだけでも、資料6に挙げる4つがある²²⁾。

資料6 感性の定義

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性。 ②感覚によってよび起こされ、それに支配される体験内容。 ③理性・意志によって制御されるべき感覚的欲望。 ④思惟の素材となる感覚的認識。 |
|---|

資料6に挙げた4点と似通った内容は、学生の「感性」のイメージ(表1～2)にも見ることが出来る。これは、「感性」の概念が、明確には捉え難いと考えられる一方で、そのニュアンス(微細な差異)は誰もが同様に捉えていることを示す。しかしながら、「学習指導要領」や解説書にはこれまで「感性」の捉え方に関するこうした現状の分析や明確な解説が示されていなかった。そのため、「感性」を主軸とする図画工作科・美術科の目標も自ずと不明確になり、結果として、目標に合った授業が行われなかったことが危惧される。

対策の一つとして、「学習指導要領」の解説に、本研究で明らかにした「感性」が自己目的的事であること、即ち「感性を育むためには感性を使う」という性質を持つことを示すことが挙げられる。自己目的的な「感性」の教育は、方法と目的が同じであるため、いずれを優先すべきか教師が明確に捉えておかなければ、いずれの指導も行わない「レッセ・フェール (laissez faire)」と呼ばれる自由放任の教育に陥る危険性がある。これを示すことにより、教師は、目標に合った授業を行う手掛かりを得ることができると考える。

IV 機能を果たす「美的」なもの

1. 「感性」を伸ばすための準備

前章の結論で、図画工作科・美術科で「感性」を伸ばす方法は、感性を働かせることによって「美的価値」を開示することとした。そのためには、「美的価値」の整理を行い、発達段階に応じた教材を作成して、指導法を確立することが課題と考える。まず、「美的価値」を整理するため、「感性」が開示する「美的価値」を表現される「内容」と捉え、その「内容」を表現した「作品（名）」を抽出し、表9²³⁾のような資料を作成することが必要である。その際、美術作品に表される「美的価値」を「感性」と対応させるには、「感性」の概念図（図1及び図2）を手掛かりにすることが可能であろう。次に、資料に挙げた作品を教材化するには、例えば、鑑賞の教材では、感性を働かせたり豊かにしたりする行為を「作品」を生み出した美術史から学び、表現の教材では、制作テーマに還元された「感性」を学べるよう構築することが肝要である。さらに、開発した教材に基づく指導法を確立することにより、抽象的とされる「感性」を具体物である「作品」に置き換え、さらにその「作品」を教材とすることで、児童・生徒が「感性」を普く経験する授業を作ることが可能になると考える。

表9 「価値」表現の分析表

内容	真（認識）	善（倫理）	美（審美）	聖
形式	油絵	フレスコ画	水墨画	壁画（モザイク画）
作品	オルナンの埋葬 （クールベ）	アポロンとダフネ （ティエポロ）	松林図屏風 （長谷川 等伯）	ダフニ修道院

2. 現代の「心」の研究

新しい「学習指導要領」でも、育成する資質や能力を、教材・発達段階に基づいて整理することを改善内容に挙げているように、現在までの教育実践では、「感性」についてのみならず、造形教育で養う資質や能力を分析的に考えることは余り行われて来なかった。その理由は、造形教育が取り扱ってきたテーマが、分析的に捉え難い人間の内面に関わる内容であったことにあると考えられるが、近年、その状況に脳研究が変化がもたらしている²⁴⁾。

「マインド・リーディング（心を読む）」²⁵⁾ といった、その人にしか分からないと思われていた「心の動き」を外から読み取る研究が進めば、造形教育においても、いつ「感性」を働かせているか、どの程度「感性」が育成されたか等の測定が可能になり、これまで哲学や心理学に頼っていた造形教育の意義についてまで、解明されていく可能性が期待される。

おわりに

森美術館で開催された「万華鏡の視覚：ティッセン・ボルネミッサ現代美術財団コレクションより」²⁶⁾ は、「視覚だけでなく、聴覚や触覚など、人間のさまざまな感覚をあらゆる方向から刺激する作品と出会い、現代アートの醍醐味を体感してみませんか。」と観る者を誘う。「多様で魅惑的な視覚を映し出す」万華鏡を覗くように、多様な作品を通して様々な感覚や世界の見方を体験することで、観覧者たちは、それを自らの内に取り込み、やがてその視点で世界を見ることができると言う。これは取りも直さず、本稿で論じた「感性」の教育的役割を述べた

ものである。「学習指導要領」風に述べると、作品に表れた「万華鏡の視覚」は、「感性を働かせること」によって受容され、一旦受容された「視覚」は、観覧者の「多様な見方」として定着して「感性が豊か」な状態となろうか。

造形という分野は、様々な感覚や知覚を伴うため、作る場合も見る場合も、感性を働かせ易い利点がある。また、造形は、創造性や想像性を内包する分野でもあるため、かつて見たことのない新しい感覚や知覚を現出し易く、感性の働きが促進される状況を創り易い。さらに、経験した新しい感覚や知覚は、造形という身体を伴う活動の特性により、個人に獲得され易く、獲得された感性は、次の表現や鑑賞活動で用いられることを可能にする。その結果が「感性が豊か」な状態であり、即ちそれが、造形教育が達成された状態となる。

今回行った学生へのアンケート結果は、一般の人々が「感性」を正確に捉えていることを示したが、中に1つ、注意を要する回答群がある。それは、「感性」を「アブリアリ」なものとする回答である。何故なら、造形を才能を示す場所と捉え、才能がないから造形教育を受けても意味がないとする考えに、この回答が結びつく可能性があるためである。「感性」とは、上記の展覧会の案内が示すように、経験を重ねることで育成できる「アポストリアリ」なものということを、教師は常にメッセージとして子どもたちに伝える必要がある。そのためにもまず、自らが「感性」の捉え方に自信を持ち、自らも「感性」を伸ばすことを畏れない意識を持つことが、教師にとって何よりもまず必要なことと考える。

註

- 1) 本稿は2008年6月1日「日本感性教育学会・研究発表大会」(於：東京)で発表した「造形教育と感性」の草稿を基に、加筆修正を行ったものである。
- 2) 「(1)保育の目標」に「カ 様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うこと。」と書かれている(『<平成11年改訂>保育所保育指針』フレーベル館,1999年12月10日,pp.4-5)。
- 3) 『小学校学習指導要領解説図画工作編』文部科学省,平成20年8月31日,p.7。
- 4) 実施日時：2008年4月10日(被験者：53名)2009年4月9日(被験者：51名),木曜1限。
- 5) この回答者は、感性を養うために必要なこととして「いろいろな経験」、感性が可能にすること「絵を描いたりする時に、色々な視点から『物』を見れたりしそうだから」と回答している。
- 6) 利点はないとした回答者の「感性」のイメージは「感受性、センス、物の捉え方」であり、これは「感性が可能にすることがある」と考える回答者のイメージと相違ない。
- 7) 2009年前期「図画工作科指導法(小)」の授業(4月16日[木]1限)で実施した。
- 8) 大岩幸太郎他『『創発』効果を志向した授業方法の研究開発—形成的評価を用いたアクティブ・ラーニングの実践—』『大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要』第26号,2008,p.133。
- 9) 表5「要約」欄の最下段「豊かな心」は、「感性」の全部或いは一部を身に付けたことによって達成される「状態」であり、そのためこれは、表4『『感性』が可能にすること』に含まれる。
- 10) 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—美術編—』文部省,平成11年9月,p.10。
- 11) 「(1)改善の基本方針【脚注】」平成20年1月17日。
- 12) 芸術はそれ自身のために存在し、他の何ものにも制約されないということ。これに対し、「人生のための芸術(l'art pour la vie)」即ち、芸術は人生に益する所があって初めてその存在の意義がある、という考え方もある(参照：新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店,2003)。また、自己目的的及び遊びに関しては、Csikszentmihalyi, M.の次の研究がある(*Flow: The Psychology of Optimal Experience*[1990], *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play*[1975])。
- 13) 横出正紀「遊びの過程—間切る(遊戯角設定)能力の獲得—」筑波大学芸術教育学研究誌『藝

術教育學』第1号, 1986, p. 2.

- 14) 横出, 前掲, pp. 6-14.
- 15) 昭和52(1977)年版の図画工作科の学習指導要領に初めて「遊び」が登場した際は「造形的な遊び」であったが, 次期改訂の平成元(1989)年以降「造形遊び」となった。
- 16) 図画工作科に「造形遊び」が導入された根拠を, 西野範夫氏は「造形」に内包される「遊び性(自由さや柔軟さ)」にあるとし, それは, フロイトの「遊んでいる子どもは, どの子ども, 自分自身の世界を創造し, というよりもむしろ自分の世界の事物を再構成していくという点では創造作家みたいにふるまうとは言えないだろうか」や, エリスの「遊びの反応は, 創造的なものであり, そこでは, 新しい要素と過去の経験とが絡み合っている。その創造的反応によって個人の行動は, 人間にとって非常に望ましい特性である柔軟性を発揮する」という考え方に基づくとする(『美育文化』Vol. 47-No. 7, 1997, p. 52, 『美育文化』Vol. 47-No. 5, 1997, p. 56.)。
- 17) 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説-美術編-』文部省, 平成11年9月, p. 25.
- 18) 中学校では昭和26(1951)年まで。但し, 昭和22年の小学校と中学校の「学習指導要領」では「豊かな美的情操」が, 昭和26年の中学校では「豊かな情操」の記述が現われている。
- 19) 『小学校 図画工作指導書』文部省, 昭和35年3月, p. 2.
- 20) 『小学校指導書 図画工作編』文部省, 昭和53年5月, pp. 14-15.
- 21) 抑々, 美学とは感性の用語から転じて作られた造語であり, それは, 感性的認識論とされ, 理性的認識論を補完する目的で始まったとされる。
- 22) 新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店, 2003.
- 23) 拙稿『『表現力』を育成する造形・美術カリキュラムの研究-新しい学習指導要領の基本方針から-』大分大学教育福祉科学部紀要30巻2号, 2008, p. 193.
- 24) 「脳科学の成果を社会に還元し, 社会の要望を担って更に脳科学を発展させていく『脳と社会』の時代が到来した」ことを受け, 「脳科学の健全な更なる発展に資するために」設立された『脳を活かす研究会』では, 『脳と芸術』のセッション等も開催されている。
<<http://www.cns.atr.jp/nou-ikasu/index.html>>
- 25) 「心をのぞく1-脳を調べ『痛み』を測る-」(朝日新聞朝刊, 2008年4月7日).
- 26) 会期: 2009年4月4日[土]~7月5日[日](参照: 森美術館HP「展覧会概要」).
<<http://www.mori.art.museum/contents/kaleidoscopic/exhibition/index.html>>

Sensitivity in Art Education — Meaning of “Sensitivity” in “Course of Study”—

UCHIDA, Yuko

Abstract

In this revision of the course of study the word “sensitivity” has been introduced into the aim of art in the elementary school. But the concept of the word “sensitivity” is too complicated to grasp the meaning. For that reason the aim of art education is indistinct. In this paper, I analyzed the meaning of “sensitivity” of the course of study of art in order to make the aim of art education clear.

【Key words】 sensitivity, play, autotelic experience, course of study